

2012年3月21日

私立大学図書館協会  
国際図書館協力委員会  
委員長 長島 敏樹 様

文教大学越谷図書館  
鈴木 正紀

## 2011年度海外研修報告書

- I. はじめに
- II. 研修参加目的
- III. 研修の概要
- IV. モーテンソンセンター・アソシエイツ・プログラム
- V. ALA Annual Conference
- VI. ピッツバーグ大学図書館
- VII. 米国滞在経験から

### I. はじめに

私は、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会の海外派遣研修により約1か月、米国に滞在し、イリノイ大学モーテンソンセンターの研修プログラム参加を中心として、米国図書館、米国社会に触れる機会を得た。

本研修への参加は私で8人目ということになる。過去の参加者は以下の通りである<sup>(1)</sup>。

年度	参加者名	所属	目的・テーマ（私大図協報告書より抜粋）
2003年度	鷹尾道代	成城大学	図書館員の専門性，組織の在り方
2004年度	梅澤貴典	中央大学	次世代資料の管理・活用，司書の専門性
2005年度	峯 環	明治学院大学	Eレファレンス，情報リテラシー教育，図書館施設
2006年度	高井 響	立命館大学	オンラインサービス，利用者教育
2007年度	伊藤秀弥	立教大学	学習・教育支援
2008年度	勢田玲生	第一藍野学院 健康科学大学	中・小規模大学図書館の組織の在り方，新人司書の教育，米国医療系図書館の現状
2009年度	山田賢悟	法政大学	Library2.0の動向

私はもともと、2010年度の派遣プログラムに応募し、その年の秋口に予定されていた研修に参加することになっていた。しかしながら、受け入れ側であるモーテンソンセンターのほうでは、2010年度のアソシエイツ・プログラムを中止し、翌年に向けてリニューアル

して実施するということが伝えられ、実際にはリニューアルされた 2011 年度のプログラムに参加をすることとなった。

私より前の派遣者は、当該年度の秋口の約 7-8 週間実施されるプログラムに参加をしていた。これをリニューアルしたモーテンソンセンター側の事情としては、センターはアソシエイツ・プログラム以外にも様々なプログラムを展開しており、そうした中でひとつのプログラムを長い期間続けるのが難しくなった、また前の 7-8 週間のプログラムも長く続いたので、再構成が必要と考えられた、ということがあったようである。結果として前回までの派遣者とは開催時期、期間も大きく変わった研修に参加し、センター側がオプションとして参加を推奨してくれた ALA の年次大会に参加するという貴重な経験をする事ができた<sup>(2)</sup>。

本報告では、こうした前回までと今回で大きく変わった 2011 年度のアソシエイツ・プログラムを含んだ、研修体験を報告したい。

## II. 研修参加目的

申込みの際に掲げた具体的な目標は次の 3 つである。

- (1) 米国の大学図書館が学生の「学び」に対してどのような支援を行っているか。インフォメーション・コモنز等の実際を見て経験することによって、自らの職場における学習支援の在り方を考えたい。
- (2) 図書館がいかなる組織形態によって運営されているのか。組織構成、スタッフが担当する職務の範囲、職階制といったものを理解することで、図書館におけるよりよいマネジメントとは何かを考えてみたい。
- (3) 図書館で働くプロフェッショナル達の専門職意識に触れることで、彼らの倫理、哲学について考えてみたい。

このうち、私が最も重視したのは(3)である。私は、大学図書館で仕事をするようになってから 20 年ほどが経つ。その間、さまざまな文献を読んだり、人の話を聞き、米国の図書館が常に世界をリードする先進的なサービスを展開していることを知った。そうしたことを知るほどに、新たなサービス、先端的なサービスを開発する人々（図書館員）はどういったメンタリティー、職業倫理を持って仕事をしているのか、ということに興味を持つようになった。それは、文献を読むだけではわからず、実際に彼／彼女たちに触れ、話をしてみないとわからないだろうとずっと考えていた。学習支援、図書館組織といったことも、自分の実務上の課題を改善するヒントをたくさん得られると期待をしていたが、なによりもこの研修では、それらのベースにある図書館員たちの「マインド」に注目した。

## III. 研修の概要

今回の研修は、以下のとおり区分できる。

- (1) モーテンソンセンター・アソシエイツ・プログラム参加 (2011 年 5 月 30 日 (月))

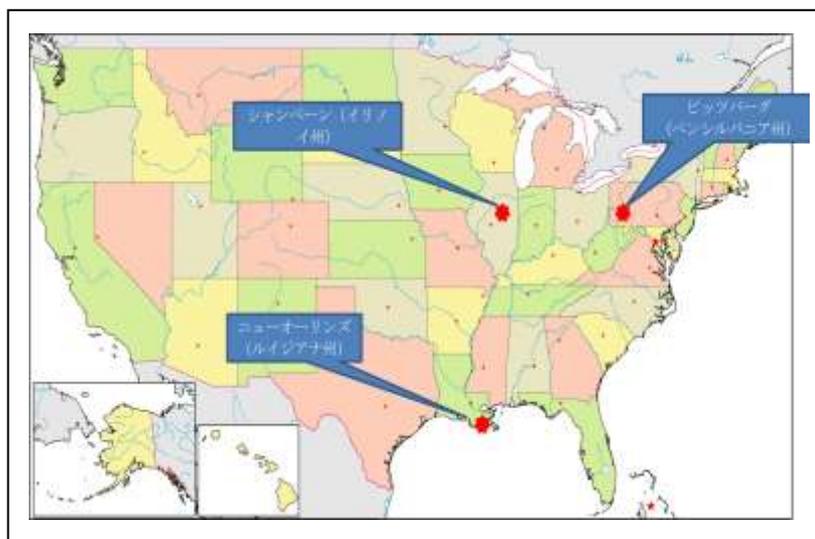
～6月21日(火))

(2) アメリカ図書館協会(American Library Association: ALA)年次大会 Annual Conference (New Orleans)参加 (6月23日～27日(月))

(3) ピッツバーグ滞在, ピッツバーグ大学図書館見学 (6月28日(火)～30日(木))

なお, このピッツバーグ滞在与見学は私大図協の派遣プログラムではなく, 私の個人的な伝手をたどって実現したものであることを申し添えておく。

ちなみに, 日本(成田)出発は5月27日, 帰国は7月1日である。



以下, それぞれについて述べていく。

#### IV. モーテンソンセンター・アソシエイツ・プログラム

##### (1) モーテンソンセンターについて

当センターについては, すでにこれまでの研修参加者が歴史的なことを含めて紹介しているので, 詳細を述べることは避ける。イリノイ大学の学部図書館 (Undergraduate Library) の中にあり, 世界中の図書館員の研修センターとして活動しているということを述べておけば足りるであろう<sup>(3)</sup>。

現在の所長は Barbara J. Ford 氏, 副所長は Susan Schnuer 氏である。ほか, スタッフとしては, 庶務的なことがらを一手に引き受けてくれる Amanda Sadler 氏, プログラム・コーディネーターとして Katie Eriksen 氏, そのアシスタントとして Jamie N. Luedtke 氏がいる。多くのセッションの講師は別にして, この 5 人により 3 週間のプログラムの運営と, それに付随する諸事の処理は進められていった。

##### (2) プログラム参加者

今回のプログラム参加者は私を含め, 9 カ国 12 名が参加した。内訳は以下の通りであ

る。

- ・ブルガリア (2名) Nikolina(Nicky) Ivanova-Bell (Serial Collections/ILL Librarian, American University in Bulgaria), Spaska Tarandova (Deputy Director, Sofia City Library)
- ・イタリア (1名) Gimena Campos Cervera (Senior Information Researcher, U.S. Embassy to Italy, Rome)
- ・エジプト (2名) Heba Mohamed Ismail (Libraries Technical Managers, Integrated care Society, Egypt), Rasha HusseinTawfik (Head of IT Department, Integrated Care Society Egypt)
- ・ウガンダ (1名) Racheal Nabbosa (LibrarianII(Academic), Makerere University Library)
- ・ナイジェリア (1名) Chinwe Veronica Anunobi (Deputy University Librarian(Digital), Nnamdi Azikiwe University, Nigeria, PhD)
- ・ガーナ (1名) Agatha Gifty Larson (Librarian, University of Education, Winneba)
- ・中国 (1名) Man Tang (Associate Professor , Xiangtan University, PhD)
- ・韓国 (2名) Hyejin Kim (Librarian, National Library of Korea), Mihyang Kim (Chief Liaison & Research Librarian, Seoul National University Library, PhD)
- ・日本 (1名) Masanori Suzuki (Koshigaya Library, Bunkyo University, Librarian, MLIS)

ちなみに、私以外はすべて女性であった。



OCLC の WorldCat サーバの前にて

### (3) プログラムの構成

今回のプログラムのテーマは、“Librarian of Tomorrow: Communication and

Leadership”。3週間のプログラムは(1) 講義, (2) 演習, (3) 図書館および関連施設訪問・見学, の3つの要素で構成されていた。

#### (4) 講義・演習

今回のプログラムで実施されたなかで特徴的と考えられる講義名を挙げておく。

- ・ Leadership Skills for Library Advocacy(6/3)
- ・ Change Management(6/10)
- ・ Grant Writing Workshop(6/13)
- ・ Communication and Marketing for Library Donors(6/15)
- ・ Written Communication in Professional Environment(6/21)

※カッコ内は講義日

一連のプログラムの中で、上にあげたような、補助金や寄付金を獲得するためのノウハウといったもの、また Advocacy のように図書館経営にとって重要な事柄に関するものに少なくない時間があてられていたように思う。補助金・寄付金については日本の図書館員からするとこれは意外な感を禁じえないが、外国では、図書館活動の原資となる資金を外部から獲得することは極めて当然のことと受け止められており、図書館員もそれが自らの重要な職務であることを自覚している。

"Advocacy"は日本語にしにくい言葉がだが、『コウビルド英英辞典』では, "Someone's advocacy of a particular action or plan is their act of recommending it publicly." あるいは, "An advocacy group or organization is one that tries to influence the decisions of a government or the authority."とある。

要は、自分たちの活動をより活性化させるため(要求を実現させるため)、その活動の必要性を(組織の管理者などに)訴え(説明し)、具体的な支援を獲得するための活動、ということができるだろうか。

この講義では、アドボカシーとはなにか、から始まって、アドボカシー活動をする際の留意点などが具体的に解説され、午後には2人一組となってアドボカシーのストーリーを作成し、ロールプレイをみんなの前で披露するという実践的なトレーニングも行われた(私はウガンダのレイチェルと組んで、新館建設の必要性を訴えるというテーマで行った)。

「講義」といっても、その多くは上で述べたように、ただ講師の話を聞くだけのものではなく、ディスカッションの要素がほとんどの場合組み込まれる(場合によっては演習も)。講師は一通り話が終わると, "Question?", "Any other Question?"と受講者に質問を促す。私の印象では、ヨーロッパ、アフリカ、エジプトからの参加者がよく質問をしていたように思う。一方、中国、韓国、日本からの参加者はあまり質問をしない。語学力の問題、ということもあるかもしれないが、それ以上に、質問することに慣れていない、そうしたやりとりを経験として蓄積してきていないといった文化的側面のほうが原因としては大きい

ような気がした。

講義・演習の中でもうひとつ印象深いことがある。それは YouTube を使ったサービスである。

・ Using New Technology to Serve Undergraduate Users (6/15)

この講義は、学部図書館を紹介する動画を YouTube のサービスを使って提供している、ということの紹介だった。米国の図書館のすごいことの一つは、新しいメディア、サービスには積極的な対応を試みることである。

以下のサイトにいくつもの紹介ビデオがアップされている。

<http://www.library.illinois.edu/ugl/about/videos.html>

とりわけ、"Library Instruction UGL Intro Rap Video"はラップのリズムによって図書館を紹介する、というユーモアに富んだもので、楽しめる。

(5) 図書館及び類縁機関訪問

3週間のプログラムの中で数多くの図書館等を訪問した。以下のとおりである。

《訪問先》

6/7

- ・ Eastern Illinois University
- ・ Charleston Carnegie Public Library

6/8

- ・ Arthur Public Library

6/14

- ・ Illinois State University
- ・ Bloomington Public Library

6/15

- ・ New Gazette (シャンペーンの新聞社)

6/16-17(Ohio)

- ・ OCLC
- ・ Ohio State University
- ・ Westerville Public Library

6/19-20(Chicago)

- ・ Chicago Public Library
- ・ American Library Association(ALA)
- ・ Chicago Tribune

ここに示したように、一泊旅行を2回おこなっている(オハイオ, シカゴ)

訪問した図書館は大学図書館と公共図書館がほぼ半数ずつ、他、新聞社、図書館協会であった。

ここでは印象に残った、Bloomington Public Library と Ohio State University の Thompson Library について述べておく。

### [1] Bloomington Public Library

Bloomington Public Library はイリノイ州にある公共図書館であるが、特筆すべきは子どものためのスペースの充実度である。



(左) Bloomington Public Library の外観

(左下) 児童「コーナー」の入り口

(下) 子ども用 PC を使う子どもたち

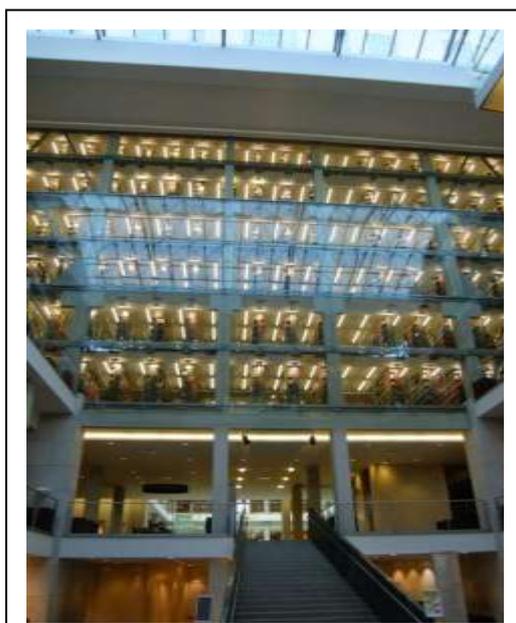


この図書館、とにかく子ども用スペースが広い。「児童コーナー」という言い方が日本にはあるが、「コーナー」などという表現ではこの広さと充実度は表現できないと思う。子ども用図書はもちろんだが、子どもが使用するのに特化した PC が多数置かれており、子どもたちはそれを使ってさまざまな活動をしていた。こうした風景は訪問した他の公共図書館でも多く見ることができた。想像するに、米国では、子どもと PC の関係（子どもの活動に PC をどのようにかかわらせるか）ということについて（少なくとも図書館においては）合意形成ができていないのではないかとされた。

## [2]Ohio State University Thompson Library

オハイオ州立大学（学生数 50,000 人）では、10 年近くをかけて新築されたトンプソン・ライブラリーに関するプレゼンテーションを受け、見学を行った。プレゼンテーションは、"Renovation 2000-2009"というテーマで、10 年をかけて学内図書館の新築とリロケーションを成し遂げたという、壮大な物語であった。たとえば、学内の意見を集約するため、教員はもちろんのこと、学部学生、大学院生のそれぞれのフォーカスグループ（FG）を作り意見を求めたこと、2006 年から 3 年間休館せざるをえなかったことから、その間の利用者に対する徹底した広報と説明を実施するなど、利用者との関係を常に意識しつつ遂行された事業であることが伝わってきた。ちなみに、このプレゼンテーションを担当してくれた Wesley Boomgaarden 氏の肩書は"Presentation Director"である。こうしたポジションがあること自体、驚きである。

図書館は 11 階建て。中は吹き抜けとなっており、資料の所蔵スペースと利用者スペースが明確に区切られている。



施設設備は最新のものが導入されているが、一方、閲覧室は伝統的な雰囲気再現すべく設計されていた。

### (6) プレゼンテーション

参加者に課されたプレゼンテーションは、参加者をその所属する図書館の性格から 2 つ（アカデミックとパブリック等）に分け、いずれかに属して協力しながら資料を作り、プレゼンテーションをする、というものである。私にはそれに加えて、日本で発生した東日本大震災によって図書館はどのような被害を被ったかを報告する、という課題も課せられた。

グループ発表については、私はアカデミックのほうに入った。ブルガリアのニッキーと韓国のミヤンがまとめ役を務めてくれ、各国の先進的なサービスを紹介する、というコンセプトで資料を作成しようということになった。日本のサービスとしては、機関リポジトリのポータルサイトである JAIRO と WebCAT に実装されている連想検索を取り上げることにした。



画面は <http://jairo.nii.ac.jp/>より



画面は <http://webcatplus.nii.ac.jp/>より

もう一つの課題である、東日本大震災と図書館については、現地に行ってからそのようなプレゼンをするよう言われたため、まったくの白紙状態から作業をせざるを得なかった。ストーリーは、以下のように構成した。

- (1)地震とそれに伴う原子力発電所での事故が起こったこと
- (2)図書館にはどのような被害が及んだか
- (3)図書館関連団体はどのようなサポートを図書館に対して行っているか（私大図協、国大図協、日図協）
- (4)被害の具体例（国立国会図書館、東北大学、筑波大学、東松島市図書館）
- (5)コメント

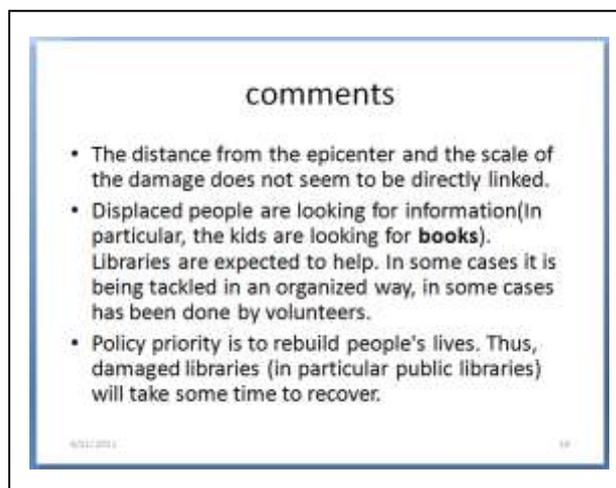
どのような被害が図書館に及んでいるかについては、写真を見てもらうのが一番よい。

国立国会図書館、東北大学、筑波大学にはいずれも友人、知人にメールで資料の提供を依頼した。また、東松島市図書館については、ウェブをあちこち見ている中で、もっとも被害写真の公開を積極的に行っていることが見て取れたので、まったく伝手はなかったが、メールで依頼したところ、写真の使用を快諾してくださった。

資料の作成はほぼ順調に進んだが、問題はプレゼンテーションの原稿である。まず、日本語で書いた後、それを Google の翻訳サービスで置き換える、という作業を何度も繰り返し、おおよそ自分の伝えようとしたことをまとめ上げることができた。複雑な言い回しは避け、シンプルな英語となるよう心がけた。当日はその原稿を読むことで乗り切ること

にした。ちなみにタイトルは、"Earthquake in East Japan and the Libraries"である。

最後のコメントは以下のスライドのとおりであるが、要は、生活に必須のものから復興は始まるのであり、図書館はそうしたものからは遅れて復興が始まる、というのが現実だということである。これが私の偽らざる気持ちであった。



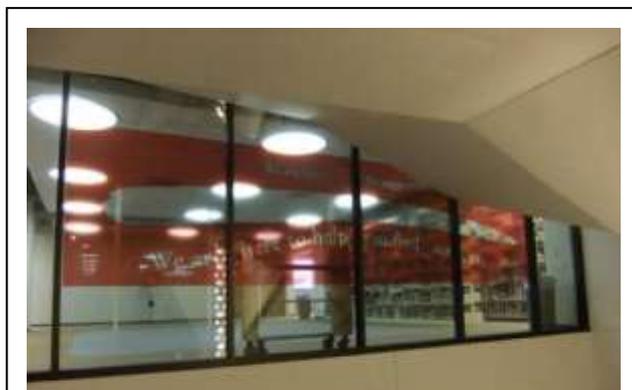
#### (7) 感想

前回までの 7-8 週間のプログラムと今回の 3 週間のプログラムがどのように異なっているかを体感的に語ることはできない。現地でお世話になったイリノイ大学図書館の野口さんによれば、密度は今回のほうが濃いのではないかと、ということであった。

講義に参加し、図書館等を見学するために車に乗って移動する。合間に宿舎で課題をこなす、生活をする。おまけに、滞在中は、日本の友人に近況を伝えるのと自分の備忘録のつもりでブログを書いていたので、かなり忙しかったというのが率直な印象である。

この 3 週間で感じたことはいくつもあるのだが、「メッセージの伝え方」と「図書館員の意識」というものについて述べてみたい。

イリノイ州立大学図書館を訪問した際、写真のような風景が視野に入ってきた。

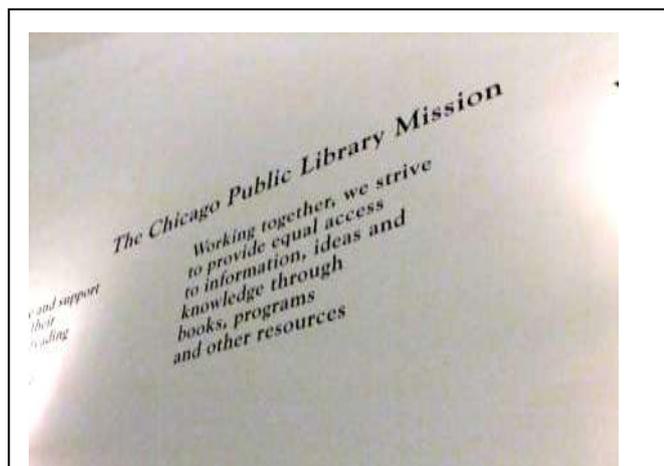


読みにくいと思うが、以下のようなメッセージが書かれている。

"We are here to help you find your way. We are here. We are your library."

「私たちはあなたが自らの道（課題解決の方法、の意か）を見つけることを助けるためにここにいます。私たちはここにいます、私たちはあなたの図書館なのです」

また、シカゴ公共図書館の入り口には、ミッションステートメントが壁に大書してあった。



"Working together, we strive to provide equal access to information, ideas and knowledge through books, programs, and other resources."

「共に働くことで、私たちは、本、プログラム、及びそれ以外の資源を通して、情報、思想、知識への平等なアクセスを提供するよう努力する」

両者とも、「図書館からのメッセージ」である。そしてそれをだれにもわかるとおりに伝えようと施設内の視界の良いところに大書してある。自分たちの姿勢を利用者にこのようにして示しているのだ。

しかし、こうした行為は、そうしたことにとどまらないように思う。

シカゴ公共図書館内には、このミッションステートメント以外にも、歴史上の著名人の名言を壁にいくつも大書していた。

ヘンリー D.ソーロー

Books are the treasured wealth of the world and the fit inheritance of generations and nations.

サミュエル・ジョンソン。

knowledge is of two kinds: we know a subject ourselves, or we know where we can find information upon it.

ここまで徹底された光景を見せられると、彼らはここで書かれていること、言われていることを心の底から信じている、それを目指して、あるいはバックグラウンドとして日々の仕事、営みをしているのではないかと思えてくる。

図書館を案内してもらっている中で、私たちが案内してくれたライブラリアンは、自分たちがミッションとして市民に果たすべき役割を当然のこととして我々に話す。

彼らは「(書かれた) 言葉」「ミッション」に対してとっても忠実なのだと思う。これは残念ながら現代の日本人において、そうした態度(自分の行為・行動を言葉によって規定しようという態度)は弱い。

換言すれば、「ミッションへの本気度」ともいべきものが、彼我の差を生みだす、その小さくない要素の一つなのではないだろうか。

## V. ALA Annual Conference(New Orleans)

アメリカ図書館協会年次大会。先にも述べたように、モーテンソンセンターのアソシエイツ・プログラムの日程自体が、この ALA 年次大会を意識し、プログラム終了後これに参加できるように組まれていた。実際、プログラム参加者からは私を含めて 5 人が参加をした。

### (1) 全体的なこと

大会そのものは、日本の全国図書館大会をイメージすればいいのかもしれないが、間違ってイメージしてはならないのはその「規模」である。大会は、プレカンファレンスを含めれば 5 日間開催される。その間に開催されるセッションは膨大な数に上る。大会プログラム冊子の厚さは 2cm を超える厚さである。



参加者総数はどこかに数字が出ているのだろうが、はっきりとはわからない。左上の写

真はオープニング・セレモニー会場の風景であるが、これだけでも、どれくらいの人が集まっているか想像していただけたと思う。

この大会に関して、私が印象深く覚えているのは以下の2点である。

ひとつは、初日、ALAメンバー向けのオリエンテーションがあるというので、私は（以前はALAメンバーだったが、現在はそうでないので）関係なかったのだが、潜り込んで話を聞いていた。そこで司会者はいろいろな話をしているのだが、その中で、集まった人たちに対し、このなかで、今よりいい仕事をしたいと思っている人はどれくらいいるか（という趣旨だったと思う）という質問に対し、半分くらいの参加者が"Yes"と手を挙げたことだ。ニューオーリンズに来る前に、このカンファレンスは、職探しのために参加する人も少なくない、ということを知っていた。その一面を目の当たりにしたわけだ。

2つ目は、これと関連するが、会場には"JobLIST Placement Center"（右上写真）というのが設けられており、図書館への就職相談やキャリア形成に関するカウンセリングなどのサービスが行われるという。ここで開催されるワークショップにはたとえば、"How to successful When Searching for Academic Library Positions - An Insider Perspective", "Using Social Media to build your personal brand..."などというものがあった。"Personal Brand"というのがいかにも米国らしい。

この人たちは、就職してしまえばそれで終わりではない。もちろん米国の図書館員にもいろんな人はいるように見受けられた。しかし、本気でやっている人間たちは貪欲だ。自ら努力し、それを支えてくれる人的ネットワークを作り（旧交を温める風景をそこかしこで見かけた）、また組織を使いながら自分の歩みを進めていこうとしている。

それを目の当たりにした。

## (2) 開催されたセッション

セッションには、有料のもの、無料ものがあり、中には、ハリケーン、カトリーナによって被災した公共図書館を復興させるというセッション（プログラム）があった。知人から大会中にこうしたプログラムがあることは聞かされていたのだが、もっとよく調べて参加しておけばよかったと思い、残念であった。

私が参加したセッション等は以下のとおりである。

- ・ NMRT (New Members Round Table)
- ・ International Librarians Orientation
- ・ President Program: From Idea to Innovation to Implementation: How teams make it happen (MCC356-357)
- ・ Academic Librarian Lightning Round! Innovative New Roles (MCC-AUDITORIUM A)
- ・ The Future is Now!: E-books and Their Increasing Impact on Library Services (MCC392)

- Now Showing@ALA: The Most Dangerous Man in America: Daniel Ellsberg and the Pentagon Papers(Film) (MCC-AUDITORIUM C)
- Demonstrating the Value of library: Assessment Tools and Technique(MCC338)
- The 21st Century Academic Library Building: a Forum on Recent Planning, Design, and Construction of New Library Space (MCC383-385)
- Using Today's Members to Plan Tomorrow's Services: Effective User Services Assessment(MC334)

主に、図書館経営に関することと、電子書籍に関するセッションを中心に参加をした。

### (3) エキジビション

エキジビションは、日本でもおなじみの情報関連企業や、大学のライブラリー・スクールなどがブースを開き、賑やかな雰囲気を作り出し、大会を盛り上げていた。

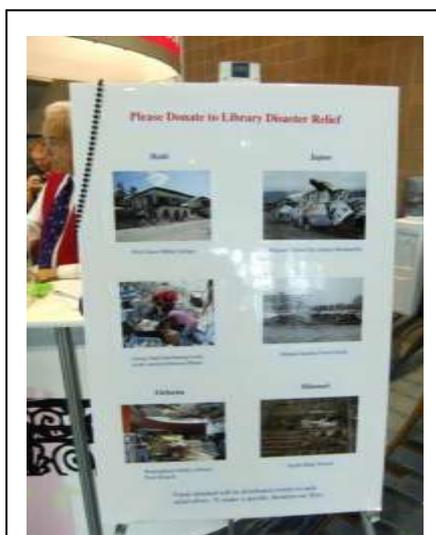


ALA のブース



議会図書館(LC)の宣伝車

エキジビションではないが、大会中、災害に見舞われた地域を紹介する資料が、参加者の行き来するホールに展示されていた。



## VI. ピッツバーグ大学図書館

ピッツバーグ大学訪問は、冒頭で触れたとおり自分の個人的伝手をたどって実現したものである。友人を介して知り合った、ピッツバーグ大学図書館東アジア図書館のグッド長橋氏を頼って、訪問をした。

メインライブラリーであるヒルマン・ライブラリー、保存書庫などを見学させていただいた。



ヒルマン・ライブラリー



保存書庫

ピッツバーグ大学図書館全体の蔵書数は、約 6,000,000 冊。しかしながらそのうちの 3分の1しかこのヒルマン・ライブラリーには置いていないとのこと。後のものは、保存書庫で、写真右のような状態で保管されている。

## VII. 米国滞在経験から

1 カ月強という、私にすれば初めての経験となる外国での長期滞在は、図書館のことはもとより、米国社会というものについて、いろいろ考えるきっかけを与えてくれたという意味でも、貴重なものであった。冒頭述べたように、今回の研修で最も知りたかったのは、彼の国のライブラリアンたちの高いモチベーションの源泉である。それがなんであるか、答えを今の段階で出すことはできないが、確実に言えることは、その源泉は米国社会の中に広く存在し、共有されている価値観に基づいているように思われるということだ。図書館だけが何も特別なのではなく、おそらく、高等教育界や産業界など、米国を構成する社会のユニットには、目の前の物事を積極的に改善していこうとする志向が本来的に内在しているように思う。

OCLC を訪問した際に聞いた話が思い出される。ここは **Shared Cataloging** という手法を開発し、書誌ユーティリティとして発展した機関であるが、最初、この **Shared Cataloging** を提案した人間は、周りからそうした手法は「クレイジーだ」と言われたそうである。しかしこの手法はその後一般化し、現代では普通のこととなっている。当初クレイジーと思われたことがのちには「常識」に変貌したのである。

"Innovation", "Challenge", "Enjoy". これは滞在中にそこかしこで聞いた言葉である。こうしたメンタリティーが彼らの先進的なサービスを開発し、世界をリードしていこうという姿勢のもとにあるのではないだろうか。失敗を恐れず、前例にとらわれず、前へ前へと進もうという力に満ちている米国図書館界の一端を肌で感じることでできた1ヶ月であった。

## 謝辞

このたびの米国研修にあたっては、多くの方のお世話になりました。私立大学図書館協会は機会と資金を提供してくださいました。特に、国際図書館協力委員会には、前回までと異なるパターンであるが故に、ALA 大会開催中の現地滞在費の支出など、初めて直面する事態に対しても、格段のご配慮をいただくことができました。メールでこちらから相談事項を送ると、スピーディに委員会としての対応を伝えてくださったことにより、現地でもどったり不安を感じたことはありませんでした。また現地では、モーテンソンセンターの Barbara J. Ford 所長を始め、スタッフの皆さんのホスピタリティあふれるご指導により、多くの経験をすることができました。当時の受講生とは（私自身は十分に使いこなせていませんが）Facebook を介していまでも連絡を取り合える環境にあります。

また、これまでモーテンソンセンターの研修に参加した方々からはたくさんのアドバイスと励ましをいただきました。実際に行った方々の話はリアリティがあり、大変参考になりました。

最後に、3月11日に東日本を襲った未曾有の災害により学事等が混乱する中、研修に参加するよう、背中を押してくれた、岸田図書館長以下、職場の上司、同僚、部下、そして資金と時間を提供してくださった学校法人文教大学学園にこの場を借りて感謝を申し上げます。

## 【注】

- (1) 2008年度派遣者である勢田玲生氏の報告書から抜粋及び加筆
- (2) オプションとして推奨してくれたのだが、研修期間を設定するにあたって、研修後にALAの大会に接続する（参加できる）ような日程が検討されたようだ
- (3) <http://www.library.illinois.edu/mortenson/>